



第21回

卓球へ、情熱いまだ尽きず

木村 興治

kimura kouji

“卓球王国”と言えば、だれもが中華人民共和国（以下、中国）を思い浮かべるだろう。しかしその昔、日本こそが卓球王国として揺るぎない地位を築いていた時代があった。日本と中国の国交が回復する前のことだ。

日本と中国の国交が正常化されたのは1972年9月29日だが、卓球界においては、それ以前から国際交流が展開されていた。

その中心にいたのが、今は亡き荻村伊智朗さんだ。荻村さんは現役時代は世界チャンピオンとして君臨し、引退後は国際卓球連盟の会長として辣腕を発揮した。

今回のゲストは、その荻村さんの活躍をよく知り、そして自らも世界チャンピオンとなり、国際卓球連盟の副会長を務められた木村興治さんだ。

木村さんに中国との交流、荻村さんとのエピソード、ご自身の卓球人生、国際卓球連盟副会長としての成果、そして卓球界の未来などについて伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

## 中国は1953年、 CHINAという“地域”名で 国際卓球連盟に加盟

— スポーツ交流という言葉がよく使われますが、日本と中国の国交回復につながったのは卓球が先駆けとなったと言ってもよいのではないのでしょうか。

中国は国策、国家的な戦略として卓球に取り組んできたという経緯があります。

— 中国はそれ以前にも何か特別なスポーツを取り上げてきたことはあったのですか。

1950年代、60年代にはなかったと思いますよ。中華人民共和国が成立したのが1949年のことでした。国際卓球連盟に加盟したのは1953年です。

— 戦後8年目のことですね。

はい。当時、国際卓球連盟は国単位だけでなく地域加盟も認めていました。例えば日本であれば、沖縄がアメリカの統治下にあった当時、独立した卓球組織を持っていて、日本卓球協会の了承を得られれば、国際卓球連盟に加盟することができたのです。



日中国交回復時、中国のOB,OGと（北京体育大学にて）

— ああ、そういうことですか。

イギリスは今でも、イングランド、ウェールズ、スコットランド、マン島、ジャージー島、ガンジー島の6つの地域が加盟しています。

そこで国際卓球連盟は、CHINAを「国」として加盟させると、中華民国（台湾）の問題があり、時間もかかるし論議にもなるということで、中華人民共和国という「地域」を統括している卓球組織として加盟させたわけです。

— CHINAという名称で、ですか。

そうです。当時、国際連合でCHINAといえば中華民国のことですよ。（「中国」の代表権が国連で中華人民共和国に移されたのは1971年）そんな時代に、国際卓球連盟

には「CHINA」として加盟できた。そのことが、中国政府、中国共産党ですが、卓球を大事にしようと思いだめた大きなきっかけになっていると思いますね。中国はその年から、早くも世界選手権に参加しています。

### 日中間の卓球交流は1956年 東京の世界選手権から

1956年に、東京で日本で初となる世界卓球選手権が開催されました。

— ああ、東京体育館のこけら落としでした。まだフロアが貼られていない土の部分があったりしましたよ。

そうでしたね。あのとき、中国はまだ国交も結んでいない日本に、選手団を派遣してきました。それは中国政府にとって大きな決断だったと思うのです。日中間の卓球交流のスタートと言えます。世界選手権は男女団体、男女シングルス、男女ダブルス、混合ダブルスの7種



世界選手権団体優勝

目があります。東京大会では、日本は男子シングルの荻村伊智朗さんが金メダル、田中利明さんが銀メダル、男子ダブルスは荻村さんと富田芳雄さんが金、女子シングルスでは大川とみさんが金で、渡辺妃生子さんが銀など、主要部門をほとんど押さえました。それに対し、中国はメダルを獲得していません。

— そのころ、木村さんは？

まだ高校1年生でした。

中国の選手が世界選手権で初めて金メダルを取ったのは、その3年後、1959年ドイツのドルトムント大会でした。容国団という男子シングルの選手で、その種目以外はすべて日本が優勝しました。

### 1961年北京での 世界選手権のあと 周恩来首相がスピーチ

その金メダルに勢いを得たわけではないのですが、中国は1961年の世界選手権開催（北京）を申請し、承認されました。中国はこの大会を国家的な大事業としてとらえ、国民を鼓舞するためにも好成績を収めることが必須であったのは容易に想像できますね。

— では大々的に強化を図ったと。

そうです。ちょうど私と同年代の選手を集め、国際交流をしていた香港から指導者を招き、日本に勝つ卓球を集中的に訓練していたようです。中国初の金メダルを獲得した容国団選手も実は香港から来た選手でした。

— その結果、中国の成績はどうだったのですか。

北京には、北京工人体育館という1万5000人も収容できる大きな体育館が建築されました。大会期間中、連日満員ですよ。男子シングルスでは、荘則棟選手が優勝。男子団体では、日本は史上初の6連覇がかかっていたのですが、それも阻止されてしまいました。



北京で開催された世界卓球時の夕食会（後列左から4番目が周恩来首相）

— そんな中、当時20歳の木村さんは星野展弥さんと組んだ男子ダブルスで優勝し、一矢報いたのですね。



はい。成績面でも、国民の盛り上がりという意味でも、この大会の成功により、中国政府は広く認知されたのだと思います。中国の要人も観戦に来られていました。

そのとき、強く印象づけられた出来事がありました。全試合が終わった最終日、閉会式が終わった夜8時ごろ、私たち日本選手団11人（監督、男子6人、女子4人）は、周恩来首相に夕食に招かれたのです。そして食事の前に、周首相の“演説”が20分ほど続きました。

### —どんな内容でしたか。

中国にはまだ古い封建社会が残っていると。女性には纏（てん）足といって幼いころに足に布を巻き付けて大きくならないようにする風習が残っていました。そのような古い制度を打破するために、スポーツは極めて重要だと。とくに中国国民に向いているのは卓球だと感じている、とおっしゃっていました。

さらに、スポーツは同じルールの中で競い合うのだから、お互いに理解を深めやすい。指導者もそうだし、応援する国民も同様である。ですから卓球を通じた日中交流を進めていってはどうでしょうかという提案でした。

### —ほう。

その後、日中両国の指導者は交歓卓球をやることを決めました。1962年からわれわれが行ったり招いたりということを経年まで続けました。

## 1972年、 日中国交正常化の直前、 中国に招かれ歓待される

### —外交の基盤にスポーツが加わり、その中心に卓球があったと。卓球がまさに世界を動かす“鍵”になっていたということでしょうか。

日中の卓球はかなり重視されていたと思いますね。1972年9月に、当時の田中角栄首相は、毛沢東主席と周恩来首相と握手をして国交が正常化されました。実はその直前、8月31日になりますが、既に選手を引退して

いた私は、日本卓球協会OB選手団の団長として中国に招かれていたのです。私たちは特別な処遇でもてなしを受けました。

3大会連続で世界チャンピオンとなった莊則棟氏ら中国の選手たちが接待役となり、周恩来首相が常に唱えていたという「友好第一、試合第二」という言葉を体現するホストぶりでした。私たちも現役時代から若者なりに努力をし、高い意識を持って中国と接していましたし、スポーツ交流は何より政治でできないことをやれるのだという誇りのようなものを常に持っていましたね。

### —田中首相が北京空港に降り立つシーンを覚えています。あのときはその交流の基盤に卓球が存在していたのだということはあまり知られていなかったかもしれませんね。

そうですね。でも田中角栄氏が飛行機を降りたときの出迎えは、とても静かだったでしょう。

私たちが香港、広州と飛行機を乗り継いでようやく北京空港に降り立った際は、夜中の2時過ぎだというのに、中国のスポーツ大臣はじめ、選手仲間や高校生たちが歓迎の花束を持ち、ワーツと並んで迎えてくれたのです。そのときに、国交正常化に際し、中国はわれわれが考える以上に卓球による交流を評価してくれていたのだなと実感しました。

### —木村さんのスポーツ外交に携わられた経験というのは、実に貴重なものですね。



第1回日中卓球交歓会（北京にて）

## 卓球は上手な人と プレーしたほうが上達する

— 卓球というのは不思議なスポーツで、初心者がレベルの高い人とやっても、楽しくプレーできるのですよね。

そうです。上手な人はそうでない人を楽しませる術を知っていますし、また初心者は上手な人とプレーすると、きれいなボールが飛んでくるので上達も早いです。安定したフォームを作りたいなら、上手な人とやったほうがよいですね。

— 温泉などでは卓球というよりもピンポンといったほうがじっくりくるかもしれませんが、何ともいえない親しみやすさのあるスポーツですね。

相手の存在を近く感じるという特徴もあるんですよ。卓球の場合は格闘技等と異なり、ぶつかったりすることなく、常に相手の顔を見てプレーをしています。ですからある程度のレベルになると、相手が何を考えているのか、焦っているなどと伝わってくるのです。選手同士、現役時代にほとんど言葉を交わすことがなかったとしても、のちにとっても深い交流ができるのは、そのためでしょうね。

## 日本卓球の快進撃は 1952年の世界選手権から

— 私は木村さんより少し年長なのですが、同じ早稲田大学出身です。高田馬場から大学へ向かう途中に、卓球屋というのがありましたでしょう。窓が開いていたので、若者がランニングシャツ一丁でラケットを握っているのをよく見かけました。

そうそう、割と安い使用料で空き時間に手軽に楽しめました。そのような一般の人たちが卓球を楽しむ場があちこちにあり、少しずつ浸透していった、将来を担う選手たちが生まれていったといえます。

日本の卓球のベースができたのは1950年代からです。1952年、昭和27年ですが、ボンベイ（インド）での世界選手権に日本は初めて出場したのです。

— あれが初めてでしたか。

そして、われわれの先輩が世界を驚嘆させたんですね。男子シングルス、男子ダブルス、女子ダブルスで3つの金メダルを取りました。1954年のウェンブリー（イギリス）大会では荻村伊智朗さんが男子シングルスで優勝。日本の卓球が世界を席巻するようになりました。



荻村伊智朗氏と（スウェーデンにて）

## 荻村さんに憧れて 本格的に卓球に取り組む

— 木村さんは卓球はいつごろから？

小学生のころはご多分に漏れず、私は野球少年でした。でも体が小さかったものですから、荻村さんたちの活躍に刺激を受けて卓球をやりたいと考え、中学に入ってから卓球一本にしました。

その日以降、引退の日まで、ペンを握らない日はあっても、ラケットと箸を握らない日はありませんでした。

— 木村さんは秋田高校を卒業されて早稲田に進学されましたが、スポーツ推薦ですか。

いえ、当時はそのような制度はなかったと思いますね。高校3年時、12月に大会が終わったあとは3カ月、素振りにしてもボールを打つことなく、受験勉強に集中しました。大学1年次は、全日本選手権の予選で敗退という無名の選手で、全日本では競技役員補助員としてお手伝いをしていました。

## 大学2年のとき、世界を目指してラバーを変え、荻村さんに勝利

そんな私でしたが、大学2年のとき、世界での活躍を目指して、思い切ってラケットのラバーを変えてみたのです。それまでは1枚ラバーといって、スポンジが入っていない、カツカツと打つタイプのラバーが好きだったわけです。でも世界を目指す人はみなスポンジの入ったラバーを使っていました。荻村さんは、ルール改正で禁止になるまで1センチのスポンジラバーを使っていたぐらいです。それが1959年に禁止になり、スポンジを入れたラバーの厚さは4ミリまでとなりました。

### — 4ミリのスポンジ入りですか。

はい。私は左利きで、それまではスポンジの入っていないラバーですから、相当強いインパクトとスピードで打っていました。それが4ミリのスポンジ入りに行ったら、スピード、回転を伴ったものすごくいい球が飛んでいくようになったのです。



全日本選手権優勝

そして私は都市対抗戦に出場しました。あのころはマッカーサー杯という名称でした。

### — マッカーサー、懐かしい名前ですね。

そうですね。新しいラバーに変えてわずか2週間、東京都の予選で私はなんと荻村さんに勝ってしまったのです。そして世界選手権で活躍している選手も打ち負かして、あれよあれよと都の代表になりました。

## 練習では荻村さんに連戦連勝だったのに全日本選手権で敗れる

その直後からですね、荻村さんが早稲田に練習に来られるようになりました。

### — 直後ですか。では木村さんをマークしたのでしょうか。

そうですね。私が20歳、荻村さんは27、28歳でした。世界で優勝経験のある荻村さんと練習するのですから、緊張しましたよ。荻村さんは「もっとやろう」「もう1回」と何度も対戦するのですが、何度やっても割と差をつけて勝てる力がつきました。

### — 木村さん、荻村さんに負けないのですか。

なぜか負けないんですよ。申し訳ないなという気持ちになったりしました。

その年の全日本選手権に、私は特別推薦で出場できることになりました。勝ち上がっていき、準決勝で荻村さんと対戦したのです。

### — どうでしたか。

ふだんの練習を思い出して、「これは勝てる」と踏んでいたら、なんと荻村さんは全く違う戦法を繰り出してきてね。さすがだなと思いました。早稲田の先輩が役員席で私の応援をしていると「タイム」をかけてたしなめたり。ネットにクレームをつけてみたり。私はずるずるとリズムを乱されて敗れました。

### — 戦略を練ることの大切さですかね。

荻村さんからは、まさにそのことを学ばせてもらいました。まあそれでも私は、1961年の北京での世界選手権代表に初選出されました。

## 遠征時は荻村さんと同室で、就寝前に必ず素振り

私が日本代表に入ってから、遠征時、必ず荻村さんと同室でした。荻村さんが私を同室に、と指名するのです。雑魚寝のときでも、「木村、おまえはここに寝ろ」と必ず隣になりました。荻村さんはいびきをかき人が大嫌い、私



は静かに寝るほうだとい  
うことが原因だったかもし  
れません。私が先輩を大  
事にして、素直に言うこと  
を聞く選手に見えたこと  
もあるかもしれません。



世界選手権混合ダブルスで優勝した  
荻村 / 江口ペア (ストックホルム大会)

### — それほど、木村さんの将来性に期待されていたとい うこともあったのでは？

そうですね。私たちはいつも一緒にいても、技術論は一切  
しませんでした。荻村さんは海外生活の経験も豊富でし  
たから、生活マナーなどいろいろ面倒を見ていただきました  
し、思いを寄せていただいてとても感謝しています。

「明日、頑張ろうな」と誓い合って寝るのですが、寝る前  
には必ずパンツ一丁で、フォアハンド200回、バックハンド  
200回、ショート100回の素振りをしました。「さあ木村、  
やろうぜ」と荻村さんに声をかけられ、終わったらお互い  
にラケットに「明日頼むぞ」と言い合って、ベッドに入りました。  
私はその習慣をそれ以降もずっと続けました。

### — その映像が残っているとよかったのに残念だな。 荻村さんと言えば、お洒落な方でしたよね。

格好よくてお洒落といえばお洒落でしたが……。でも面倒  
くさがりだったんですよ。本来は後輩の私がやるべきだ  
ったのかもしれませんが、ユニホームを洗わないのです。ど  
うするかというと、オーデコロンをぶっかけて干しておく  
んです。床屋も行かない。大会が終わってホテルの床屋に  
行って髪を洗ってもらったら、いくらシャンプーをつけても  
泡立たずに黒い汁が出てくる。まあ、それほど卓球に集中  
していたということですよ。

### — それは面白いな。

## 木村さんのコピー、 チャイナ・キムラ選手の存在

### — 中国には、チャイナ・キムラという選手がいたそう ですね。なんでも木村さんと同じ攻め方をするコ ピーのように育てられた選手だとか。「打倒・木 村」のために養成されたということでしょうか。

そのようです。余長春という選手で、年齢も近いので今  
でも交流していますよ。

### — その人と試合をしたことはありますか。

はい。彼は中国のトップクラスの選手たちと1日8時間か  
ら10時間も練習をこなしていました。ですから1965年ご  
ろには、レベルの高い中国で男子シングルの8枠に入る  
選手になっていましたね。

### — そんなにプレースタイルは似ていたのですか。

それはもう。彼は私を“大先生”と呼んでくれるのですが、  
2006年に日中の卓球交流50周年を記念して、北京に行  
き、中国側も古い選手が全員集まりました。私と彼が並ん  
でフォームを披露すると、みんなが「全く同じフォームだ」  
とあらためて驚いていました。



中国で“木村のコピー”と言われた余長春氏と (バンクーバーにて)

## 1988年のソウル大会から オリンピック競技となる

### — 卓球がオリンピック競技に加わったのは、1988年の ソウル大会からでした。意外と遅い印象ですね。

国際卓球連盟にオリンピック競技に入ろうという機運が  
ようやく生まれ、その流れの中で、1987年2月、荻村さん  
が選挙で現職会長を破り3代目会長に就任したことが大  
きかったですね。

オリンピックの正式競技となったソウル大会



— 欧州生まれのスポーツの国際競技連盟の中で、日本人が会長になったのは日本はおろかアジア人としても初の快挙でした。

そのとおりです。卓球がオリンピックに参加しづらかった理由はいくつかあります。

初代会長のモンタギュー氏は40年もの長きに渡り会長職に就いていました。その方は「卓球は人間のぶつかり合いだ。ボーダーレスでいいじゃないか」という考えの持ち主でした。

もう一つは、それまで卓球の世界選手権では国旗・国歌を使用していませんでした。それは本来、国単位ではなく地域単位の加盟が可能だったからです。

— ああ、その流れですね。

さらにヨーロッパで卓球強国といえば、東欧諸国でした。もともとはプロとアマの概念がなかった卓球ですが、東欧で貧しいけれども卓球の強い人たちは、お金のためにプロフェッショナルとして請われてイギリスに行くという歴史がありました。そのため、「アマチュアの権化」と言われたブランデー氏がIOC（国際オリンピック委員会）会長の在任時代は、参入は難しかった。それがキラニン氏を経て、サマランチ氏が会長になって様変わりしたのです。

— 初代会長の考え方は、本質的には理解できるのですがね。

私もです。でもオリンピック競技かどうかで世界の評価も変わってくるということで、国籍主義にシフトチェンジし国旗も使用するようになり、オリンピックにたどり着いたということですね。

— とにかく世界最高レベルをという方針に変わりましたからね。

## タモリさんの一言で卓球が変わった！

1988年、ソウルオリンピックで初めて卓球が実施されました。その経験を踏まえ、荻村さん率いる国際卓球連盟は、次の1992年バルセロナ大会までの間に、数々の改革を行いました。

まずボールの色を白からオレンジイエローへ。卓球台は緑一辺倒からブルーも使われるようになりました。選手のウェアも白やいろいろデザイン化されたものでも着用できるようになりました。

— テレビ映りを意識してカラフルになったのですね。

その意味で、私たちはタモリさんに感謝しているのですよ。

— それはなぜ？



彼は1990年ごろ、卓球のことを「根暗（ネクラ）のスポーツ」と言ってくれたんです。そのとき私たちは反発しましたがどね。でも確かに、ボールが白かったので、見やすいようにとユニホームは単一色でしたし。

### — ああ、黒とか紺とか。

そう、それが何しろダサイと言うのです。そこで少しずつ変えていった。ある日、荻村会長はサマランチIOC（国際オリンピック委員会）会長に「テニスにはオレンジ色のボールがあるじゃないか。卓球も考えてみたら？」と示唆されて、ボールにもカラー球を導入するようになりました。ピンクの卓球台はさすがに採用されませんでした。フロアは通常ワインレッドですが、オリンピックではブルーにしてフェンスはオレンジにするなど、親しみやすさとテレビ映りを追求し続けています。

### — IOCによる競技ごとのランクづけというものもあるのですよね。

そうなんです。ランクによってIOCから各競技団体への予算配分が変わってくるのです。2008年の北京オリンピック後、卓球はDランクでしたが、今はようやくCランクに上がりました。それ以降も、ボールの直径が38ミリから40ミリへと2ミリ大きくなり、21点先取の5ゲーム制から11点先取の7ゲーム制へ移行して、卓球の改革は次々と進んでいきました。

## “ラケット・ドーピング”という難題に取り組む

### — しかしその志半ば、荻村さんは1994年12月、惜しくも肺がんで逝去されました。荻村さんの遺された功績として、1991年に千葉で開催された世界選手権で、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の統一コリアチームの出場を実現させたことも挙げられますね。

はい。

### — 1983年から国際卓球連盟の理事を務められていた木村さんは、その22年後、2005年5月に執行副会長に就任されました。（2013年5月退任）オリンピック競技になると同時に変革を続けてきた卓球ですが、選手の対応にも何か変化は見られましたか。

卓球ほど用具次第でプレーが戦略的になったり、プレースタイルが変わるスポーツはないかもしれません。その要因に、ラケットのラバーがあります。現在、国際卓球連盟で公認しているラバーは851種類です。

### — そんなにあるのですか。

選手がこういうラバーが欲しいという、メーカーはルールと照らし合わせながら新しいラバーを開発します。メーカーがマーケットを見てほとんど購入されなくなったラバーがあると、国際卓球連盟は「この品番は使用禁止になります」とアナウンスします。でもそこまで2年かかるので、どんどん種類が増えていくのです。今、頭を悩ませているのはラバーをラケットに接着する際に用いる特殊な溶剤の問題です。



水谷選手（ロンドンオリンピック）

### — 溶剤で何が変わるのですか。

例えば、特殊な溶剤を塗るとボールのスピードが増すのです。その溶剤はシンナー系で揮発性が高く、吸引すると非常に危険です。ラケットとラバーを接着する場所は、空気が完全にオープンな所でないといけません。それが2004年のアテネ大会のとき、組織委員会はその部屋を地下に設置し、IOC（国際オリンピック委員会）委員などの関係者に見られずに接着できるバキューム式のシステムをつくってしまったのです。

私は国際卓球連盟の会議でとなりましたよ。卓球にとっての恥部じゃないですか。IOC委員だった猪谷千春さんや岡野俊一郎さんにも相談しました。

—では、その溶剤は禁止されたのですか。

されたのですがね、今度は揮発性のない同様の機能を持った溶剤が開発されたのです。もちろんルールに抵触しています。まさに“ラケット・ドーピング”ですよ。今、日本が中心となって、除去するため徹底的に取り組んでいます。

—水谷隼選手が抗議活動をしていましたね。

そうです。彼は何度も日本チャンピオンになっているエース的存在の選手ですが、「この違反行為が解決するまで国際大会には出ない」と宣言して実行していました。私たちは日本選手には「フェアプレーは勝利よりも大事なことだ」とたたき込んでいるので、もちろんだれもやりません。でもヨーロッパでは依然まかり通ってしまってますね……。解決に向けての最終段階には来ていますが。

## 卓球の価値を守りながら 国益も守る

—国際競技連盟の役員を務めるということは、当然、その競技の世界的な利益を考慮することが第一だと思いますが、日本の“国益”について配慮されたことはありましたか。

ありますよ。サービスに関するルール改正が提案されたとき、私はその案を却下したことがあります。中国とドイツの提案でした。

—それはどんな提案でしたか。

サービスの際に、「ボールを16センチ以上上げてから落下したボールをインパクトしなさい」というルールがあるのです。ネットの高さは15.25センチで、ちゃんと16センチ上がっていたのかどうかネットの高さと比較するのですが、実際、審判は判断しづらい。だから、「肩より下にラケットを構えて、ボールが頭上に上がってからインパクトするとわかりやすくなる」といった内容でした。日本の審判も賛成しました。

—それなのに、なぜ木村さんは反対したのですか。

福原愛の王子サービスは、構えたときに既にラケットは肩の上に着ているのです。

—あ……。

背の低い人が考え出した独創的なサービスを封じるようなルールの改悪はあってはならない。それぞれの体格に合った特性を活かしたプレーができるルールにしておかなければ、と発言したら、アフリカやラテンアメリカの国々から大きな拍手をもらいました。



福原選手（ロンドンオリンピック）

## 2014年の世界卓球が急きょ 東京開催に決まった経緯

—いろいろ問題はあるながらも、2014年4月には日本での世界選手権ですね。

はい、東京でやります。日本では7回目ですが、東京は1956年、1983年に続いて3回目の開催です。



福島で開催されたJOC復興支援イベント



— 1956年のときは、私はまだアナウンサーになる前でしたが、ラジオ放送を聞いてとても面白かったですね。非常に印象に残っています。

ラジオ中継は速いラリーを瞬時的に的確に伝えてすごいですね。

— 日本での世界卓球ということですが、前回は2009年に横浜で開催されていますね。

日本としては10年に一度ぐらいの開催が目安かと思っていましたので、2014年の大会を開催する腹つもりは本当はなかったのです。開催が決まったのは2011年3月末のことでした。

— では東日本大震災直後に……？

そうです。国際卓球連盟から、お見舞いや支援の申し出がありました。そのころ、被災者の方たちが、寒中、水や食料の配給に長い列を成してじっと待っている姿が世界のメディアで映し出されていたんですね。それを見て、「日本人は厳しい状況の中にあってもあれほど我慢強いのか」「他の国であれば略奪が起きてても不思議ではないのに」「あの姿に感激した」といった連絡をたくさんいただきました。そこから、近いうちにぜひ東京で世界選手権をやってほしいという強い要望が出されるに至ったのです。

— 他国からそういう声が挙がってきたのですね。

はい、そこで被災地の卓球協会の方たちに連絡をとりました。すると「われわれはつらい状況にあるけれども、うれしいバックアップにもなるだろうし、応援もしたい」と賛同していただくことができて、急ぎ申請をしました。国際卓球連盟の総会では先に手を挙げていた国があったのですが、「東京で開催するならば、われわれは潔く身を引きましょう」ということで、満場一致で決定しました。

## 成績が伴ってこそ 大会成功といえる

— では特に責任の重い大会となりますね。

ええ。われわれは決まっすぐに「WASURENAI 3.11」という横断幕をつくり、全ての大会で掲出し、ナショナルチームの選手も全員それを胸につけてプレーしています。2011年4月からそのアナウンスを始めたところ、5月にはもう他国の選手も「WASURENAI 3.11」とつけていて驚きました。

被災地からは、子どもたちと指導者をお招きする予定です。被災地と密な連携と絆を持ちながら、役員も選手も全員が気持ちを一つにして大会を成功させる覚悟です。

— かなり盛り上がるでしょうね。

この大会は団体戦で行われます。2012年のロンドンオリンピックでは、日本女子は福原愛・石川佳純・平野早矢香の三人娘が初めて銀メダルを取りました。成績も伴わ



なければ大会は成功したとは言えませんので、選手たちは高い意識を持って頑張ってくれています。また私も、日本卓球協会の役員として最後の世界大会開催になりますので、一丸となってなんとしても成功させたいですね。

## “世界中が中国人選手”の事態を防ぐための手立て

### — これからの卓球界の将来についてお聞かせください。

やはり中国の圧倒的な強さは変わらないでしょう。しかも、世界中で中国から移った選手に割と簡単に国籍を与えるので、中国でナショナルチームに入れない選手がたくさん移り、帰化しています。そのため、女子のヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカ、オセアニアの大陸チャンピオンは今すべて中国人です。

### — にわか代表ですな。

国際卓球連盟ではその対策として5年前にルールをつくりました。そこで、ある国・地域の協会から別の協会に移籍した選手で、世界選手権に出場したい選手はレジスター（登録）しなければならないようにし、21歳以上はレジスターを受け付けられないようにしたのです。18歳以上の人は5年間保留。15歳以上の場合には3年間保留。14歳以下であればいつでも出られますが、14歳で代表になるのは稀なことですよ。どうしても違う国に移籍するならば、できるだけ早いうちにして、せめてその国の文化や言葉に慣れ、その地域に根ざすようにというねらいを込めての改革です。

### — オリンピックでは？

この条項はオリンピックにはあてはまりません。しかし北京オリンピックまではシングルスは各国に3枠ありましたが、ロンドンからは2枠にしました。これは表彰台独占を防ぐためです。

### — なるほど、取れても金と銀だ。

中国はこの改正をたいへん嫌がりましたけどね。

## 文化大革命に翻弄された 荘則棟氏

### — しかし中国の強さは、やはりこれからしばらくは不滅でしょうか。

そうですね。中国の場合、卓球の成長が中国共産党と密に結びついていますから。卓球選手は国のために努力しているのです、世界チャンピオンになると給料はどんどん上がります。それが文化大革命の時代（1966～1976年ごろ）、そういった資本家層を毛沢東が否定しようとし、卓球選手も批判される対象に組み込まれてしまったのです。

紅衛兵の若者に、ビールケースのようなところに立たされ、三角帽子を被せられて自己批判を求められ、街でつばをかけられてといった悲惨な目に遭うのですよ。中国で初の世界チャンピオンになった容国团や育てた監督、コーチは自殺に追い込まれました。



荘則棟氏と、荘氏の自筆の書を持って

### — 痛ましいことですね。

私が尊敬する荘則棟という世界チャンピオンになった人は、私と同年でしたが、今年2月、病気で亡くなりました。彼の人生もまた波瀾万丈でした。華々しい選手生活を送ったのち、文化大革命で失脚。その後、周恩来首相に救い出され、スポーツ大臣にまで上り詰めたのですが、文化大革命を主導した江青ら四人組が失脚したあと、同じ一派と見なされて投獄生活を送りました。その後、名誉回復はされましたが、このように中国卓球界は中国の歴史と密接につながっていて、「あれらの時代を経て今日がある。だから私たちは負けれないのだ」といった強い思いがあるように感じられます。

## 強化育成プログラム 「JOCエリートアカデミー」

— 日本では、2008年にナショナルトレーニングセンター（以下、ナショナルトレセン）ができて、卓球は「JOCエリートアカデミー」という強化育成プログラムのもとでいち早く有望選手を輩出しているんじゃないですかね。

ナショナルトレセンの開所式の時、私は劣悪な環境で力をつけていった先輩たちのことを思い、涙があふれて仕方ありませんでした。今の選手は本当に恵まれた環境にいます。子どもたちはよくやっていますが、アスリートとして大きく羽ばたくために、厳しい姿勢を自らに課することが重要です。そしてその姿勢は、選手生活を終えてからも同様です。そのことを指導者も選手も、互いに理解して2020年に向かうべきだと考えています。

— エリートアカデミーの選手の皆さんは、どのように選抜されているのでしょうか。

小学生の大会の成績から有望選手をピックアップし、ナショナルトレセンで合宿を行います。将来、日本を背負っていく選手になれるかを、プレー、体力、知性、気力等の面からコミュニケーションしながら評価していきます。それらを何回か積み重ね、攻撃的な選手、ディフェンスの強い選手、カットの上手な選手といったように代表チームとしてのバランスを考えながら選抜し、最終的には親御さんと面談をして決めていくのです。



JOCエリートアカデミー開校式

## 卓球を通しての 人生の方向性を 自ら思い描くこと

— 文武両道といいますが、卓球を通しての人間教育についてはどうお考えですか。

水谷隼選手は義務教育のころからドイツに卓球留学していました。「勉強の面でも遅れをとらない」と言い切ることはできませんが、勉強だけでは得られないものを確実に得ているはずで、また勉強面をカバーするため、私は随分本を送ったりしていました。

— なるほどね。



木村興治氏

同時に、自分は今後どういう選手になりたいのかというビジョン、志をしっかり持ってほしいと願っています。

私はいつも“目標”と“目的”を分けて考えていました。目標というのは、具体的にこの大会でこういう成績を収め、最終的にこういう選手になるといった達成すべきものです。目的のほうは、自分の卓球を将来にどのように結びつけるか、どんな人生を送っていくのか、自分の人生を考える方向に持っていくためにどうするのかといった、達成、完了というところのない大きな人間面の部分に区別して考えてきました。

同時に、自分は今後どういう選手になりたいのかというビジョン、志をしっかり持ってほしいと願っています。

## セカンドキャリアは “フューチャー・プッシュ” の視点で

— 各競技団体が取り組み始めているセカンドキャリアについてはいかがでしょうか。





ロンドンオリンピック開会式

率直に言えば、こちらはまだ不十分なんです。基本的には、将来の方向性を見付けるのは自分であるということを実感してほしい。そういったイメージがあれば、私たち先輩はいくらでも相談に乗ります。

スポーツ基本法もできました。2020年には東京にオリンピックがやってきます。付随して、スポーツに対する政府や国民の考え方ももっと深くなっていくでしょう。ですからそういう中で、自分は指導者になりたい、スポーツの国際的な業務に携わりたい等、将来の自分を見据えてもらいたい。

私の現役時代もそうでしたが、選手というものはどうしても、プレゼント・プッシュ (present push)、現状にしか目が向かない傾向にあります。しかしある程度のレベルの選手になったら、今度はフューチャー・プッシュ (future push)、将来をどうとらえてそこに向かっていくかを見つめることが極めて大事だと思っています。

## 2020年東京オリンピックを素晴らしい大会に

— さあ2020年、東京に56年ぶりにオリンピックがやってきますね。

スポーツ人としては、待ちに待った大会です。日本は平和国家であるということを発信するチャンスです。20世紀はいわば、政治的なイデオロギーの違いに、スポーツとアスリートが巻き込まれた時代でした。

— 1980年のモスクワオリンピックでの西側諸国のボイコットはその典型でしたね。

そうです。今の時代は政治的なイデオロギーのぶつかり合いは少なくなってきたものの、民族・宗教の対立はまだ結構あります。2020年の東京では、それらを抜きにして、期間中は休戦協定を結んだ古代ギリシャオリンピックのように、ひたすら人と人が能力の限りを尽くしてぶつかり合う、そんな素晴らしい大会にしたいものですね。そして、それが生きて、世界に引き継がれて欲しいと願っています。



ロンドンオリンピック女子団体で銀メダルを獲得した日本チーム



## 卓球の歴史

1921  
大正10

日本初の統轄卓球組織が創設される

1931  
昭和6

日本卓球協会の前身「日本卓球会」が発足

**1940** 木村興治氏、秋田県に生まれる

**1945** 第二次世界大戦が終戦

1946  
昭和21

戦後間もなく日本卓球協会の再建が行われる

第1回の全日本選手権を開催

**1947** 日本国憲法が施行

1949  
昭和24

国際卓球連盟への再加盟

**1950** 朝鮮戦争が勃発

1951  
昭和26

全日本実業団選手権大会がスタート

**1951** 安全保障条約を締結

1952  
昭和27

日本人選手が世界卓球選手権大会に初出場  
7種目中4種目に優勝

**1955** 日本の高度経済成長の開始

**1961** 木村興治氏、世界卓球選手権  
男子ダブルス優勝

**1963** 木村興治氏、世界卓球選手権  
混合ダブルスで優勝(2大会連続)

**1964** 東海道新幹線が開業

**1963** 木村興治氏、世界卓球選手権団体で  
男子監督兼選手として優勝

**1969** アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972  
昭和47

旧アジア卓球連盟を脱退し、中国他協会と共に、  
アジア卓球連合を創設

**1973** オイルショックが始まる

1976  
昭和51

創立45周年を機に日本卓球協会が財団法人化

**1976** ロッキード事件が表面化

**1978** 日中平和友好条約を調印

**1982** 東北、上越新幹線が開業

**1983** 木村興治氏、国際卓球連盟理事に就任

**1984** 香港が中国に返還される

1988  
昭和63

ソウル五輪よりオリンピック種目となる

**1995** 阪神・淡路大震災が発生

1996  
平成8

アトランタ五輪で4種目3つの入賞(ベスト8)

アジア卓球選手権大会で、女子シングルスで小山  
ちれが金メダル。男子ダブルスで出場した2組(松  
下雄二・仲村綿治郎ペア、高志 亮・森本洋治  
ペア)が共に銅メダルを獲得

1997  
平成9

世界選手権男子ダブルスで、松下浩二・渋谷 浩  
ペアが銅メダル

1998  
平成10

アジア卓球選手権大阪大会で女子シングルスで  
小山ちれが銅メダル。女子ダブルスで武田明子・  
川越真由ペアが銅メダル。男子シングルスで偉関  
晴光が銀メダル

アジア競技大会卓球競技で男子団体が銅メダ  
ル。混合ダブルスで遊澤 亮・岡崎恵子ペアが銅  
メダル

2000  
平成12

世界選手権団体で男子チームが19年ぶりに3位  
銅メダル

2001  
平成13

世界選手権大阪大会で女子団体、女子ダブルス  
(武田明子・川越真由ペア)が銅メダル

2002  
平成14

アジア競技大会で女子団体が3位

2003  
平成15

アジア選手権バンコク大会で女子団体3位、女  
子ダブルスで小西 杏・福原 愛ペアが29年ぶりの  
銀メダル、混合ダブルスで鬼頭 明・小西 杏ペア  
25年ぶりの銀メダル

日本ろうあ者卓球協会が日本卓球協会に加盟

2004  
平成16

世界選手権で女子団体が、銅メダル

2005  
平成17

テレビ東京系列6局ネットにて世界選手権大会  
の放送が開始

**2005** 木村興治氏、国際卓球連盟執行副会長に就任

2006  
平成18

世界選手権で女子団体が3大会連続となる銅メ  
ダルを獲得

2008  
平成20

世界選手権で男子団体、女子団体が銅メダル(男  
子は8年ぶり、女子は4大会連続)

日本知的障害者卓球連盟と日本肢体不自由者卓  
球協会が日本卓球協会に加盟

**2008** 木村興治氏、日本卓球協会副会長に就任

**2008** リーマンショックが起こる

## 卓球の歴史

2009  
平成21

世界選手権で男子ダブルスの水谷隼・岸川聖也ペアが12年ぶりとなる銅メダル獲得

2010  
平成22

世界選手権で2大会連続の男子団体、女子団体が銅メダル

2011  
平成23

世界選手権で男子団体が、3大会連続の銅メダル

2012  
平成24

ロンドン五輪、女子団体（福原愛、石川佳純、平野早矢香）が銀メダル獲得（五輪卓球で日本初）

## 木村 興治 (きむら・こうじ)

---

1940年秋田県生まれ。世界卓球選手権で61年男子ダブルス優勝。混合ダブルスでは63年、65年と2大会連続優勝。67年男子監督兼選手として団体優勝を成し遂げる。現役引退後は日本卓球協会副会長、JOC常務理事などを歴任し、2007年から2013年5月まで国際卓球連盟執行副会長を務める。

## 西田 善夫 (にしだ・よしお)

---

1936年生まれ。スポーツ評論家、元NHKエグゼクティブアナウンサー、解説委員。64年の東京大会以来オリンピック10大会で実況、5大会で解説・キャスターを務める。98年から02年まで横浜国際総合競技場初代場長。著書に『オリンピックと放送』（丸善）ほか。

## 山本 尚子 (やまもと・なおこ)

---

東京都生まれ。スポーツライター、NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事。スポーツビジネス・シンクタンク勤務を経てフリーとなり、スポーツを中心に執筆活動を行う。『パラリンピックがくれた贈り物』など著書・共著多数。

## フォート・キシモト (写真提供)

---

半世紀にわたり、オリンピック、FIFAワールドカップ、世界陸上などの世界のビッグイベントから市民スポーツに至るまで、幅広くスポーツの写真取材活動を継続して行っている世界的なフォト・エージェント。

企画制作 公益財団法人 笹川スポーツ財団

後援 文部科学省、東京都、公益財団法人 日本体育協会、公益財団法人 日本オリンピック委員会、  
特定非営利活動法人 日本オリンピックズ協会、東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会

メディア協力 (株)共同通信社、サンケイスポーツ

特別協力 (株)アシックス、(株)伊藤園、(株)JTB